

博 士 論 文 (要 約)

日本語の自動詞構文と他動詞構文の習得：空間概念の場合

鈴 木 陽 子

第1章 序論

日本語には「あく—あける」や「しまる—しめる」のように形態的に似た形をもち、意味としても同じ事態を表すことが可能な自動詞と他動詞のペアが存在する。このような現象は自他対応と呼ばれ、佐藤（2005）によれば、つぎのように定義される。

(1) 自他対応の定義：

- a. 意味的条件：自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である
- b. 形態的条件：自動詞と他動詞が同一の語根を共有している
- c. 統語的条件：自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している

（佐藤, 2005: 170）

例えば、(2) は (1) の条件をすべて満たす文である。

- (2) a. 自動詞文： 窓が あく。
- b. 他動詞文： 太郎が 窓を あける。

(2a) と (2b) は全く同じ意味を表すわけではないものの、同じ事態をそれぞれ別の視点から叙述していると解釈することが可能である（意味的条件）。「あく (ak-u) —あける (ak-eru)」は同一の語根 *ak* を共有し（形態的条件）、自動詞文 (2a) のガ格「窓が」と他動詞文 (2b) のヲ格「窓を」は同一の名詞句「窓」で対応している（統語的条件）。同一の語根は共有していないものの、それ以外の条件を満たす「はいる—いれる」や「でる—だす」も日本語教育の教科書や指導では自他対応のある動詞と合わせて一緒に提示されることが多い（中石, 2003: 169）。

本研究は、1歳6ヶ月から5歳の日本語母語児とその養育者の自然発話データを分析することによって、ペアを成す自動詞と他動詞の使用とその発達過程について考察を行う。本研究が対象とするのは、子どもが早い時期に使用する「あく—あける」、「しまる—しめる」、「はいる—いれる」、「でる—だす」、「のる—のせる」、「おちる—おとす」の6つの自他動詞対、合わせて12の動詞である。これらの動詞は、世界のどの言語を話す子どもも早期に話し始めると言われる人や物の存在—非存在—再出現、物の交換—所有、人や物の移動—位置、

物のさまざまな状態および状態変化などを叙述する動詞であり、子どもの初期の動詞学習において重要な動詞群である。一方で、ペアを成す自動詞と他動詞はそれぞれ別々の活用をし、同一文脈で使用されることが多く、動詞の必須要素となる名詞句や格助詞が頻繁に省略されることから、どちらが自動詞でどちらが他動詞かを子どもが理解し、学習するのは難しいことのように思われる。日本語を母語として習得をする子どもたちは、果たしてどのようにして自動詞と他動詞を習得し、自動詞と他動詞の形式と意味の違いを理解していくことができるのだろうか。

以上の問題意識から、本研究は、1歳6ヶ月から5歳の8人の子どもとその養育者の自然発話データを分析することによって、自動詞と他動詞の使用と発達過程を明らかにし、子どもの語彙知識と構文知識の習得について考察することを目的とする。本研究が取り組む研究課題は以下の3つである。

研究課題1：自然発話における自動詞と他動詞の使用、動詞の発達過程の記述

研究課題2：自動詞と他動詞の区別

研究課題3：自動詞と他動詞の誤用分析

研究課題1「自然発話における自動詞と他動詞の使用、動詞の習得過程の記述」では、分析対象とするそれぞれの動詞を含む発話にみられる特徴を記述し、子どもが利用可能なインプットにはどのような情報が含まれているか、子どもの初期の動詞の使用にはどのような特徴がみられるか、子どもの使用はインプットの特徴をどの程度反映しているか、などについて分析を行う。具体的には、(i) ペアを成す自動詞と他動詞の使用頻度には差がみられるか、(ii) 動詞の項となる名詞句は発話のなかで明示されているか、(iii) 名詞句が明示される場合にそれらは格標示されているか、(iv) どのような構文での使用が多いか、という4つの点から分析を行う。さらに、子どもの動詞の使用を縦断的に観察することによって、どのようなプロセスを経て子どもの言語が発達していくのかを記述する。

研究課題2「自動詞と他動詞の区別」では、養育者から与えられるインプットの特徴を踏まえ、子どもが自動詞と他動詞の区別をするにあたってどのような手がかりが重要だと考えられるかについて考察を行う。

研究課題3「自動詞と他動詞の誤用分析」では、自動詞と他動詞の誤用の特徴を整理し、その特徴が子どもの言語使用やインプットにみられる特徴とどのように関連しているかを

考察する。また、誤用と考えられる子どもの使用について、「何については誤っているが、何については誤っていないのか」という観点から子どもの語彙知識と構文知識の発達について考察する。

研究課題 1 については第 4 章と第 5 章で、研究課題 2 については第 6 章で、研究課題 3 については第 7 章で論じる。

第 2 章 理論的枠組み

子どもが学習する語彙は、自然発話では単語として単体で与えられることはなく、その他の表現と結びついた発話として耳にする。そのため、子どもの語彙や文法学習のメカニズムを理解しようとするとき、その語がどのような発話のなかで使用されているかという言語的コンテキストに注目する必要がある。しかしながら、言語習得理論では、動詞の学習メカニズムを考える際に同じように言語的コンテキストに注目しながら、考え方の異なる 2 つのアプローチが存在する。Gleitman (1990) によって提案された統語的ブートストラッピング (Syntactic Bootstrapping) と Tomasello (2003) による用法基盤モデル (Usage-based Model) による言語習得理論である。この 2 つのアプローチは、いずれも動詞の学習にその動詞が用いられる言語的コンテキストが重要な役割を果たしているという観方を示しているが、インプットの役割や言語的コンテキストによって結びつけられた形式と意味とが他の語彙・文法項目の習得にどのように寄与するかという点で異なる言語観をもっている。本研究は、日本語の自動詞と他動詞の発話を分析することを通して、統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの 2 つの考え方のうちどちらのアプローチによる説明がより自然発話データにみられる特徴に符合するかを検証する。

第 3 章 データと分析方法

本研究の分析には、養育者と子どもの縦断的自然発話データベース CHILDES (MacWhinney, 2000) から 8 つの日本語データ、Miyata コーパス (Miyata, 1992, 1995, 2000, 2004) から Aki, Ryo, Tai (以降それぞれ AKI, RYO, TAI と表記)、Ishii コーパス (Ishii, 2004) から Jun (以降 JUN と表記)、MiiPro コーパス (Nisisawa & Miyata, 2009, 2010; Miyata & Nisisawa, 2009, 2010) から Arika, Nanami, Tomito, Asato (以降 APL, NJD, TOM, ALS と表記) を使用した。表 1 は、対象とするデータについて子どもの性別や年齢、子どもと養育者の発話数、ファイル数をそれぞれまとめたものである。

表 1 分析データの概要

対象児	性別	年齢	発話数(子ども)	発話数(養育者)	ファイル数
AKI	男	1;6– 3;0	22,003	20,941	55
RYO	男	1;6– 3;0	11,150	7,250	75
TAI	男	1;6– 3;0	30,432	45,780	70
JUN	男	1;6– 3;0	32,034	33,244	63
APR	女	3;0– 5;0	46,166	39,679	53
NJD	女	3;0– 5;0	11,306	19,031	21
TOM	男	3;0– 5;0	9,877	17,383	17
ALS	男	3;0– 5;0	11,178	14,935	12
合計		1;6– 5;0	174,146	198,243	366

データは、1;06 から 3;00 までの子どものデータが 4 つ (AKI、RYO、TAI、JUN)、3;00 から 5;00 までの子どものデータが 4 つ (APL、NJD、TOM、ALS) で構成され、これらのデータを分析し比較することによって自動詞・他動詞ペアの発達の様子を長期的に観察する。8 つのデータを合わせて 174,146 の子どもの発話と 198,243 の養育者の発話を含む 366 のファイルを分析対象とした。

第 4 章 自然発話における自動詞と他動詞の使用の特徴

第 4 章では、ペアを成す自動詞と他動詞の養育者と子どもの使用全体の特徴を分析した。自動詞と他動詞の使用頻度では、「あくーあける」以外の動詞について、自動詞の方が有意に使用頻度が高い傾向が確認された。日本語では格助詞が頻繁に落ち、動詞の必須要素となる名詞句が省略されることが多いが、本研究の分析データについても同じ特徴を養育者と子どもの両方の発話において確認した。全体の約 50%の発話は名詞句を含まない発話であり、格標示される名詞句が現れる発話は非常に少なかった。

動詞が活用された形を特定の意味と形式を持った「構文」として捉え、それぞれの動詞が生起する構文のパターンを分析すると、頻繁に使用される動詞形には自動詞と他動詞との間に違いが観察された。自動詞では結果状態を表すテイル形やタ形が頻繁に使用され、他動詞では相手に行為を要求するテ形や意思形などの動詞形が頻繁に使用されていた。ペアを成す自

動詞と他動詞の出現頻度に有意差があること、さらに自動詞と他動詞とでは頻繁に使用される動詞形の種類において異なる特徴がみられることから、自動詞と他動詞の非対称的な言語使用を確認した。このような特徴は、養育者と子どもの両方の発話に共通してみられた。これは、子どもが耳にするインプットが非対称的な特徴を持っており、子どもはそのような特徴を持つインプットから統計的学習を行い、それぞれの動詞を学習していくことを示唆している。

第5章 ペアを成す自動詞と他動詞の習得プロセス

第5章では、6つの自動詞と他動詞のペアについて、子どもがどのような形式と意味から発話を開始し、言語使用がどのように複雑に発達していくのかを分析した。その結果、ペアを成す自動詞と他動詞はほぼ同じ時期に使用され始め、頻繁に使用されている構文の多くが、初期に習得されたものと一致することが分かった。このことは、子どもがインプットにおいて頻度が高く、際立ちの高い形式に基盤を置き、学習を進めていることを示唆している。また、子どもが特定の動詞を使用する構文のタイプ数は、言語発達初期にはわずか1〜3であるが、その後徐々に構文の数が増えていく様子を確認することができる。最もタイプ数が増えていくのは2;06以降の時期であるが、タイプ数の増え方は動詞によってさまざまである。こうした言語使用にみられる特徴は、用法基盤モデルが説明する保守的な学習者としての子どもの発達プロセスと符合し、1歳半ごろの子どもたちがこれらの動詞について項目依拠的構文が使用できる段階にあることを示すと考えられる。

第6章 自動詞・他動詞の区別

第6章では、第4章で得られた子どもと養育者の動詞の使用にみられる特徴を踏まえ、どのような情報を手がかりにして子どもが自動詞と他動詞の意味と形式の区別をし、学習することが可能かという問題について分析と考察を行った。文法関係を明示する格標識は、自動詞構文であるか他動詞構文であるかを判断するために有効な情報であるが、養育者の言語使用のなかでは、使用頻度が低く、特に目的格を標示する格助詞「を」は発話のなかにほとんど登場しないため、このような区別のための手がかりとしては有力な候補であるとは考えにくい。自然談話のなかで交わされる発話の約半分がどのような名詞句も含まれない発話だという点を考慮すると、残されるのは自動詞と他動詞で頻繁に用いられる構文が有効な情報を提供しているという可能性である

1;06～3;00 までの 4 人の子ども（AKI, RYO, TAI, JUN）の養育者の発話データを対象に、12 の動詞について自動詞で頻繁に使用されるテイル形とタ形を合わせた生起頻度を求め、その頻度についてクラスター分析を行った。その結果、いくつかの問題は残るものの、およそ自動詞群と他動詞群との大きな違いを捉えることができた。この結果から、特定の動詞形の頻度分布が自動詞と他動詞との違いを区別するために有効であることが示される。動詞形は単純に形式とその頻度において特徴があるばかりでなく、自動詞が依拠するテイル形とタ形は結果状態を報告し、他動詞が依拠するテ形は行為要求を表すというように、それぞれの動詞形が持つ発話意図においても大きな違いがある。さらに、テイル形やタ形は、結果状態に焦点を当てる構文であることから、事態の変化が生じた後のタイミングで発話されるが、テ形や意思形などは事態の変化を求めるために、あらかじめ発話され、談話の時間の流れにおいて、事態の変化に対する出現位置が異なる。このようにしてみると、繰り返し使用されることで定着された頻度の高い自動詞、他動詞構文が、それぞれに重要な発話意図を持ち、さらに談話の流れにおいても役割分担をすることによって、子どもが対になる自動詞と他動詞のペアを習得していくことができるのだと考えられる。

第 7 章 自動詞・他動詞の誤用

第 7 章では、自動詞と他動詞の誤用について分析を行った。誤用には、「自他の誤り」、「格助詞の誤り」、「語彙選択の誤り」、「他の動詞形の代替」、「独創的な動詞形」、「言いさし」など大きく分けて 6 つの種類の誤用が観察された。自他の誤りでは、自動詞を他動詞として使ってしまう誤りと他動詞を自動詞として使ってしまう誤りのどちらも観察されたが、自動詞を他動詞として使用してしまう誤りの方が頻度が高かった。また、誤用が生じる構文は、テイル形やテ形など、それぞれの動詞で頻度の高い構文であった。このことは、誤用が生じるメカニズムの背後にインプットにおける頻度の分布や、より定着された構文かどうか関わっていることを示している。

自他動詞の誤用について、何についての誤りか、何については誤っていないかを考察すると、子どもは全く異なる発話意図を表す構文を使うような誤り（例えば、相手に何かしてほしい場合にテイル形を使うなど）はほとんど犯さないことが分かる。これは、子どもが自動詞か他動詞かという語彙の選択よりも、テイル形や意思形といった構文の形式とそれが表す発話意図をより重視し、定着した言語知識として持っていることを示している。

第8章 まとめと結論

以上の分析結果と考察を元に、統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの2つを比較すると、本研究は用法基盤モデルが得られた観察を説明する理論として符合すると結論づける。1つには、用法基盤モデルが予測するように、日本語習得児の自動詞と他動詞の発話は、いくつかの具体的な構文を基盤にして始まっていた。子どもの初期の動詞は、2、3の非常に限定的な構文において、限定的な対象に対してのみ使用されており、この時期の子どもの動詞に関する言語知識は、大人が持っているような知識とは大きく異なる考える。統語的ブートストラッピングでは、刺激の貧困の考えから、不十分なインプットからでは適切な動詞の意味を推論することができないという前提に立っているが、本研究で観察した子どもたちは、インプットのなかで頻繁に使用されている極めて限定された構文を用いて動詞の使用を開始していた。その後、徐々に子どもは使用できる構文のタイプ数を増やし、さまざまな名詞と組み合わせて使用することができるようになるが、その発達も統語的ブートストラッピングが予測するような早いものではなく、ゆっくりと進み、インプットで使用される構文を基盤として変化していく様子が観察された。このような観察は、動詞の学習プロセスにおけるインプットの役割を重視する用法基盤モデルの考え方と合致する。

また、本研究は、動詞が活用された形を特定の意味を持った「構文」として捉え、子どもの動詞使用の分析を行ったが、構文を単位として分析することによって、子どもの自動詞と他動詞の使用における特徴の違いをより明確に示すことができた。自動詞と他動詞とでは、頻繁に用いられる構文の種類に違いがみられ、そのような特徴を子どもは養育者から与えられるインプットから学習していると考えられる。頻度の高い構文は子どもの動詞使用の初期に現れ、その後の動詞学習の基盤となるため、このような構文の役割は動詞習得のプロセスを理解するうえで重要である。また、自他の誤りが多く生じる構文の種類においても、頻繁に使用されていた構文の存在が関わっており、語彙の発達プロセスと構文の発達プロセスとの関連について理解するための、重要なきっかけを与えている。自他の誤りが動詞を使用し始める2歳頃には現れず、3歳前後になってから現れるのは、それまでの時期の動詞が活用された形の構文として学習されていたことを示していると分析した。このように自動詞と他動詞の誤用がなぜ3歳前後に現れ、なぜ特定の構文で現れるのかという問いについて、用法基盤モデルに基づく構文に着目した分析によって妥当な説明が与えられるのではないかと考える。

参考文献

- Gleitman, L. (1990). The structural sources of verb meanings. *Language Acquisition*, 1, 3-55.
- Ishii, T. (2004). *Japanese: Ishii corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-054-5.
- MacWhinney, B. (2000). The CHILDES project: Tools for analyzing talk. 3rd ed. Vol.2. The Database. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Miyata, S. (1992). Wh-Questions of the third kind: The strange use of wa-questions in Japanese children. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College*, 31, 151-155.
- Miyata, S. (1995). The Aki corpus: Longitudinal speech data of a Japanese boy aged 1;6-2;12. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College*, 34, 183-191.
- Miyata, S. (2000). The Tai corpus: Longitudinal speech data of a Japanese boy aged 1;5.20 – 3;1.1. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College*, 39, 77-85.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Aki corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-055-3.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Ryo corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-056-1.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Tai corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-057-X.
- Miyata, S., Nisisawa, H. (2009). *Japanese: MiiPro-Asato Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-474-5.
- Miyata, S., Nisisawa, H. (2010). *Japanese: MiiPro-Tomito Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-472-9.
- 中石ゆうこ (2003) 「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 第 52 号, 167-174.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009). *Japanese: MiiPro-Nanami Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISMB 1-59642-473-7.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2010). *Japanese: MiiPro-Arika Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISMB 1-59642-475-3.
- Noji, J., N. & Miyata, S. (2004). *Japanese: Noji corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-058-8.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 東京：笠間書院.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.